

## 一九四三年早稲田大学の一側面

——新学生道樹立運動をめぐって——

望 月 雅 士

### はじめに

社会学者として著名な森岡清美氏が戦後五〇年の節目の年に出版した『若き特攻隊員と太平洋戦争』は、「生死の狭間で悩みながら任務の達成に献身した特攻隊員の群像を、より生き生きと描き出」すことを目的に書かれた作品である。森岡氏は一九二三年生まれで、まさに学徒出陣世代に属する。<sup>(2)</sup>森岡氏のこの作品は所属部隊ごとに特攻隊員を位置づけ、その手記を用いて出撃までの日々を丹念に追ったところに特徴がある。本書のなかで森岡氏は、戦局悪化が顕著となる一九四三年の早稲田大学について次のように論じている。

「早稲田大学では、一九四三年二月から三月にかけて新学生道樹立運動が起こり、全学的に燃え広がって徴兵猶予特権奉還の声に結集した。そのため、学生の徴兵猶予停止が発表されると、海軍予備学生に応募する者が二〇〇〇名

の多きに上り、応募者総数の一割を占めたという。合格者のうち第十四期飛行科予備学生となった者は市島を含めて約三八〇名、総数の一割強を占めた。なお、同年九月入隊の第十三期飛行科予備学生四九七六名を出身校別にみると、早稲田大学出身者は四一七名でもっとも多く、第二位の日本大学出身三一九名を断然引き離していた。一九四三年二度にわたる早稲田大学からの大挙応募・大挙入隊は、日本学生史上記憶に値する出来事であって、東京帝国大学とは雰囲気を異にすることに注目したい<sup>(3)</sup>。

森岡氏によれば、一九四三年二月から三月にかけて、早稲田大学では新学生道樹立運動が起こり、全学的に徴兵猶予特権奉還の動きへと結実し、その結果、第十三期および第十四期の海軍飛行専修予備学生の「大挙応募・大挙入隊」を巻き起こしたという。そしてこれを「日本学生史上記憶に値する出来事」と意義づける。

森岡氏が論拠としているのは、『第二集 きけ わだつみのこえ』に収録されている木戸六郎の手記である。木戸は一九二四年一〇月四日生まれで、四四年一〇月政治経済学部へ進学、四五年一月津田沼陸軍鉄道学校に入隊し、特別甲種幹部候補生となり、同年五月戦病死している<sup>(4)</sup>。木戸によれば、一九四三年二月から三月にかけて起った新学生道樹立運動は「日本の学生間にみなぎっていた現状打開の悩みが解決を求めて爆発をした一つのあらわれ」で、早稲田大学では「全学的に火が上がった<sup>(5)</sup>」という。木戸の描くところでは、学生研究団体が学生義勇軍と結び、体育団体各部とも連携、さらには学部、学院、専門部とも連絡して「一大運動<sup>(6)</sup>」が展開されたとする。ところが、このような「一大運動」にもかかわらず、浩瀚で知られる『早稲田大学百年史』には、わずか一頁足らずのなかに、学生の自主的な勤労作業として紹介されているに過ぎず<sup>(7)</sup>、その『年表』<sup>(8)</sup>には全く記載がない。

本稿は、まずはこの新学生道樹立運動について明らかにし、その検証を通じて一九四三年段階の学生意識について考察する。一九四三年は学徒出陣に象徴されるように、早大のみならず全国の学生にとってひとつの画期となった年

である。だが、学徒出陣に焦点があてられる一方で、その段階に至るまでの学生の意識と行動は必ずしも判然としない。戦局悪化が著しくなるなか、学生の置かれた環境と戦争に対する意識はどのようなものだったのだろうか。そうした点が明らかになっていないために、森岡氏の記述ともなり、また『早稲田大学百年史』の無理解にもつながっていると考えられる。本稿はそうした戦争と学生をめぐる課題について、早稲田大学で起こった新学生道樹立運動を通して検討する。さらに学生たちを前に大学は何を説いたのかを検証し、大学と戦争責任に関わる問題にもアプローチしていくこととする。

本稿で主として分析の対象とするのは、『早稲田大学新聞』<sup>(9)</sup>（以下『早大新聞』と略）である。『早大新聞』（一九二二年一月五日創刊）は早稲田大学新聞社が毎週水曜日に発行し、主として早大生を読者層とする新聞である。同社の代表（発行兼編輯印刷人）は、一九四三年時点では第一高等学院教授の工藤直太郎、編集長は中島太郎学生課長で、記者に相当する編輯員は学生によって構成されていた<sup>(10)</sup>。そのため署名記事を除き、記事は学生を主体に書かれているが、太平洋戦争段階では、その紙面が大学の意向に沿って編集されていることは言うまでもない。とは言え、『早大新聞』が戦時中の早大、とくに学生の意識や動向を知るうえで最も情報量の豊富な資料であることも間違いない。本稿はこの『早大新聞』を用いて、右の課題に迫っていくこととする。

なお、一般的に「学徒」とは「学生」と「生徒」を合わせた用語であるが、本稿では引用文を除き、「学徒」の意味合いも含めて「学生」という言葉を用いることとする。

## 一 新学生道樹立運動の理念と実践

### 1 新学生道樹立運動と学生

まず新学生道樹立運動については、『早大新聞』と新聞各紙からその経緯を追ってみたい。『早大新聞』が新学生道樹立運動について最初に報じたのは、一九四三年二月一七日号である。同紙は「最近学園内に真の時局下日本学生道の確立、即ち学生本然の姿に立って赤誠報国の信念の下に、積極的に邁進するの気風が学生自身の中から澎湃として起り、その心からの叫びを全学に訴へんとする。学の精神的改革、運動が現れた」と伝え、その実践として春休み期間中に軍需工場か鉾山、あるいは農村に泊まり込んで「廿四時間の魂の錬成」を実施する旨を報じている。そして同紙によれば、全早大生の参加はもとより、全国の学生層への運動拡大が目標とされ、費用は宿所と食費を除いて自弁で、余剰報酬があった場合は、国防献金として役立てることになっていた。<sup>11)</sup>

二月二六日には、大隈小講堂で募集演説会が開催され、三月六日から二〇日までの春休みを「献納」して海軍の土木工事に協力し、軍の監督の下で「錬成」を行うという具体的な計画が報告された。<sup>12)</sup> 募集演説会后、各級委員や学生委員らが各教室へと遊説を繰り広げ、「決戦下の学生々活の中から『故郷に帰る』といふ言葉を抹殺せよ、今こそわれ等自らの手で、憂国の魂を一つに結集し、国家目的にひたむきに進むときが来たのだ。われ／＼と同年配の若者たちはいま醜の御楯として泥水をすゝり、第一線に戦つてゐる。全国の学徒よ！いざ起て！」と、学生たちに参加を呼びかけた。

三月五日には大隈講堂で、新学生道樹立運動の実践として早稲田大学勤労鍛錬学生隊の結団式が挙行され、<sup>13)</sup> 田中穂

積総長が激励の辞を送り、また「今回の壮挙に感動した」<sup>(15)</sup>小笠原道生文部省体育局長が来校し、挨拶を述べた。<sup>(16)</sup>学生隊の中心は、大隊長の磯部忠男や幹事の田島利治らであり、いずれも九月に繰り上げ卒業を迎える学部三年生だった。彼らの呼びかけに学生団体、運動団体、あるいは個々の学生が応じていったのだが、このうち文化団体からは東亜協会、函南会、南洋研究会、経営経済学会、亜細亜研究会、国防学研究会、政治同攻会、英語会、健歩部などが参加した。<sup>(17)</sup>それぞれの団体の実態は判然としないが、たとえば東亜協会は、一九〇四年五月二九日発会の清韓協会を母体とする学生研究会で、一九四一年には「日支一体、東亜共栄圏建設の大理想への挺身隊」<sup>(18)</sup>となるべく活動を行っている。東亜協会のみならず募集に応じた学生団体は、総じて「東亜共栄圏建設」、「国防」、「南方経営」など、時局に強い関心を持っていたと言えよう。<sup>(19)</sup>

参加学生数は正確にはわからないが、五〇〇名を目標に参加を募ったところ、『早大新聞』三月三日号<sup>(20)</sup>では、定員の五〇〇名に達する見込みとあり、締め切り直前の段階になっても目標人数に達していなかったことがわかる。結団式について報じた三月六日付の諸新聞の報道は、『朝日新聞』が五〇〇名、『読売新聞』が五五〇名、『毎日新聞』には七〇〇名を突破したとあって異なるが、実際に参加した学生の体験談に五〇〇人分の食料やおやつを調整したとの回想があることからすると、せいぜい五〇〇人程度の参加だったのであろう。

では、勤労鍛錬学生隊の実践は、どのようなものだったのだろうか。学生隊に参加した学生たちは、春休み中の三月五日から二〇日までの一六日間、合宿を行いながら、千葉県八重原の海軍工事に携わった。<sup>(21)</sup>後半の五日間、学生らと起居をともした『早大新聞』編集部の後藤力記者のレポート<sup>(22)</sup>によると、参加学生は六個中隊二個小隊<sup>(24)</sup>に分かれて活動を行い、記事から判明する範囲では、第二中隊は専門部各科生、第三中隊は第一高等学院生で、その第一小隊は文科、第二小隊は理科と分かれていた。第五中隊は文化団体、第六中隊は体育団体で、技術班は理工学部生と専門部

工科生の一四名で構成されていた。

現地に五日間滞在した後藤記者は、最終前日の三月一九日の作業経過を次のように記している。夜明けとともに「総員起し五分前」の号令が伝達されると、隊員は広場へ集合。日章旗が掲揚され、磯部大隊長が「青少年学徒に賜はりたる勅語」を捧読。宮城遙拝、郷里への挨拶ののち、「海ゆかば」を斉唱。体操密形に散開、海軍体操開始。午前六時三〇分朝食。八時作業衣に着かえ、集合。磯部大隊長の挨拶後、中隊長の号令に従って現場へ向かい、作業を開始。

作業内容は技術班の場合、敷地全体の高低を測量したり、杭を打つたり、土地計画の高さを記したりすることで、理工学部二年生の本吉和男によれば、通常の実習とは違い、責任をもたされた任務のため最初のうちは戸惑ったが、技術方面からのサポートもあり、日増しに慣れてきたとコメントしている。第二中隊は土掘り、土捨てを行いながら、道路建設の作業に従事した。第一高等学院生で編成された第三中隊は、土堤を崩して池を埋め立てる作業を行うなど、主として土木作業に携わった。午後三時作業終了。これが後藤のレポートにある一日の作業内容である。

翌二〇日の退所式では、海軍側から住木直二建築部長が「青春の熱血を国家に捧げ、未経験を見事に征服して、飽くまで能率を高めることに努力し（略）今後は更に学徒の本分を十分に活用し、帝国の指導者たるべく精励精進されることを望む」と訓示し、これに対し大隊長の磯部忠男が参加学生を代表し、「われ／＼学生に対し過分なお褒めの言葉を賜はり感激に堪へません。今後は奉皇救国、日本学生道確立の目標に断乎邁進することをこゝにお誓ひします<sup>(25)</sup>」と答えている。

後藤はレポートの末尾に、一三日間の中隊ごとの延人員、搬出台数、一人一時間当たりの平均積込量、造成面積を示し、活動の成果を報告している。そして活動終了後の四月八日には、報告講演会が科外講演部の主催の下に大隈講

堂で開かれ、大学幹部の他、学生代表者として大隊長の磯部、一般参加学生代表の中瀬洋一、文化団体代表柴和夫、体育関係代表建川英男が報告を行った。<sup>(26)</sup>

以上の経緯からわかるように、新学生道樹立運動とは、「赤誠報国の信念」に立って学生自身が主体的に「国家目的」に貢献することを目指す運動であり、その活動の実践としてまずは春休みを「奉還」し、海軍の土木工事に奉仕する活動だったと言える。その点で学徒隊の実践は、すでに本格化していた大学による勤労報国隊の奉仕活動<sup>(27)</sup>とは、学生の主体性という点で違いがあった。

## 2 運動の限界

そもそも、新学生道樹立運動が一九四三年に入ってあらわれてきたのは、どうしてなのだろうか。そしてその背景には、学生を取り巻く環境にどのような変化があったのだろうか。前掲の『早大新聞』はこの点について、「我々と同年配の同胞は既に戦火渦巻く第一戦に、泥水をすゝり草の根をかみ、あらゆる苦痛と試練を、唯一筋、大君の醜の御盾としての活躍を続けてゐる」一方で、「この祖国興亡<sup>(28)</sup>の秋なほ学生なるが故に、与へられ、許された種々の特権がある、だがこの特権に甘へてはならない」と説明している。ここでいう学生の「種々の特権」のひとつが徴兵猶予であることは改めて言うまでもないだろう。この『早大新聞』の記事からは、「同年配の同胞」がすでに戦場の第一線で戦闘を続けているなかで、学生にはその「特権」に甘えていてよいのかという問題が突きつけられていたことがわかる。もとよりこのような学生に対する批判は、太平洋戦争以前から学生を管理する側がしばしば用いてきた論理だが<sup>(29)</sup>、戦争の長期化のなかで学生の「特権」が社会から許容されなくなりつつあるとともに、それを負い目とするような環境が説得力を持つようになってきたことを示している。<sup>(30)</sup>新学生道樹立運動はこうした学生への社会的批判を克

服すべくあらわれてきたと言える。

では、活動に参加した学生たちは一三日間にわたる「勤労鍛錬」から何を修得し、またいかに総括したのだろうか。四月一六日、第五中隊に所属した文化団体学生による懇親会が学生ホールで開催された。『早大新聞』四月二一日号には、その懇親会での大隊長磯部はじめ六人の幹部学生、および九団体のコメントが掲載されているが、<sup>(3)</sup>勤労を通じて団体力、集団力の意義を感じ、今後はその力を国家に向けるという意見が目立つ。ところが、国家に向けて何をするかという点になると何も明確には語られておらず、ましてや徴兵猶予奉還について言及するものはひとつもない。第五中隊には、前述のように政治意識の強い学生が集まっていたが、それでもその総括として徴兵猶予奉還に触れるものは皆無であった。むしろ幹事の田島が、「われ／＼の行動が単なる勤労奉仕に終るならば情ない、鍛錬によって体得した意欲を学問の上に植付けねばならぬ」とコメントし、亜細亜研究会も「勤労によつて国家へ当然のことをなして早稻田へ帰つたわれ／＼は学問上においても国家へ当然のことをせねばならぬ」(以上、傍線は引用者)と述べているように、彼らにとつては学生隊の活動の成果を学問上いかに反映させ得るかが課題だったのである。

もつとも、参加学生のなかには「国家目的」への貢献と徴兵猶予奉還とを結びつける者がいたことは想像に難くない。前述の木戸六郎はそうした学生たちのひとりだったと推測される。木戸は中野正剛の門下<sup>(32)</sup>ということであるから、学部進学前の一〇歳代の時にその薫陶を受けた、血気盛んな学生だったのかもしれない。なおこの時期、学生のなかから現れた奉仕活動は、この新学生道樹立運動に限ったことではない。慶應義塾大学では、三人の法科の学生が「かういふ大切な時代に学生のみが休んでは申訳ない」と、二月二四日に渋谷区役所を訪れて勤労奉仕を申し出て、三月一日から見習書記の仕事を始め<sup>(33)</sup>ている。また同大学では、本科の学生が三月五日から春期休暇に入ったが、「決戦下の春を一日たりともブラ／＼過ごししてはならない」と休暇を一週間返納し、五日から全学生が銃剣道、柔剣道、射撃、

体操などの訓練を開始するなど、休暇返納の動きは必ずしも早大に限ったことではなかった。「一大運動」とまではいかないまでも、有志の学生が休暇を返上して勤労奉仕に従事する動きが、一九四三年の春に現れていたことは確かである。

では、新学生道樹立運動の推進力となってきた大隊長の磯部忠男は、学生隊の活動をどのように総括したのだろうか。前述したように、磯部は三月二〇日の退所式で参加学生を代表し、「学生道」確立に向けて「断乎邁進」を誓ったが、一九四三年九月の繰り上げ卒業を間近に控えた『早大新聞』九月八日号の座談会では、次のように述べている。

「学生の生活は時局が変れば変るその度毎に変化してゐます。そして単に学生心理が変るばかりではなく、その大本を引き締める学校の組織自体も相当の進展を伴つてゐると思ひます。錬成部や報国隊の結成など、これらは一時代前の学生々活には存在しなかつたものです。しかしここに僕の指摘する変遷は表面的に際立つた特色であつてそれが吾々の学生々活を基底的にゆるり動かす域には未だ達してゐないやうにも思はれます<sup>(35)</sup>」。

磯部は大学が錬成部（後述）を設置し、報国隊を結成するなど戦争への協力体制を熱心に推進しつつも、学生たちの意識のなかでは、その「学生々活を基底的にゆるり動かす域には未だ達してゐない」ことを率直に認めている。言葉を換えていえば、学生の間では、戦争への協力体制が国家や大学が思い描くようには浸透していないということである。磯部は「具体的な勤労鍛錬についていひましても、もつと勤労鍛錬の企画などを学生自身の手により自主的に委ねてくれなくちや思つた程の効果が上らぬと思ひますね<sup>(36)</sup>」とも述べている。国策に応じて大学が勤労奉仕のための出動を学生たちに命じても、実際には効果が低いことを磯部は指摘している。大学が国策を前のめりで進めても、学生生活の「基底」部分はなかなか変わらない現実を磯部は見ていたのである。新学生道樹立運動の実践が千葉県八重原の海

軍工事後、続かなかった理由のひとつがここにある。

### 3 大学幹部による意義づけ

前述の四月八日の勤労鍛錬学徒隊の報告会は大学主催の科外講演会として催され、『早大新聞』の記事をそのまま記せば、「田中総長はじめ杉山錬成部副部長、小沢教務課長、北村大佐、今田教授ら多数出席」し、川原科外講演部長の司会の下で進行したとある。『早大新聞』は田中総長以下、川原部長を含め六人の大学幹部の名前を明記するが、なぜこの六人なのだろうか。田中総長以外の五人の大学内でのポジションについて確認しておこう。まず杉山謙治は昭和初年から調査課長として学内の学生動向の調査に従事したのち、一九四〇年一〇月の学徒錬成部新設に伴い、第二高等学院教授・教務主任から錬成部副部長（教授）に転じ、錬成部長の田中総長を支えた。一九四三年六月一四日には、田中総長の錬成部長辞任に伴い、その後任に嘱任されるなど、まさに「錬成部新設・運営につき総長の最高のブレイン」であった。なお、杉山は津田左右吉出版法違反事件の際には、蓑田胸喜を中心とする帝大肅正期成同盟にも参加している。

今田竹千代は哲学、ドイツ語を専門とし、一九四一年二月からは第二高等学院教授・学生係主任に学徒錬成部教授兼主事も兼務し、四二年四月高等師範部に錬成指導者育成のための国民体錬科が設置されると、国民体錬科教務主任も兼ねた。小沢恒一は教授法を担当し、教務課長として学徒錬成部の新設に関わったひとり、一九四三年時点では大学副幹事教務課長の要職にあった。川原篤は政治経済学部政治学科教授で国際政治と国際法を専門とし、科外講演部長などの要職を兼ねていた。北村勝三は一九四一年から配属将校として着任し、後に少将に昇進してメレヨン島守備隊長となっている。

つまり、この報告講演会に集まった大学幹部として明記されたのは、学徒錬成部と科外講演部の関係者、および配属将校だったことがわかる。学徒錬成部は一九四〇年一月七日に新設が決定し、田中総長自ら部長となった。その設置目的は「国体の本義に基き皇運扶翼の確固不拔なる精神を体得し、偉大なる国民の先達たるべき智徳体兼備の人材錬成」を行うことにあり、「国是即応」、「体力錬磨」、「集団訓練」を綱領とした。<sup>(45)</sup> 田中は学徒錬成部の創設について、『早稲田学报』一九四一年一月号の「回顧と展望」で、「昨年秋他の官公私立の大学に率先して、学徒錬成部を創設し、我学園の歴史に於て画期的の革新に着目し得た」と自賛し、「西三年の後即ち在学生の過半が錬成部の訓練を経たる暁に於ては、我学園の学風は其面目を一新するに相違ないと確信する<sup>(46)</sup>」と期待をかけていた。科外講演部は学部の授業が時局を反映しにくい<sup>(47)</sup>ため、政府からの要請を「比較的急速に実現し得る箇所」と位置付けられ、頻繁に開催された。とくに川原が部長就任（一九四二年一月）<sup>(48)</sup>以後の科外講演会は四二回のうち、軍人を一四回講師として招いている点に特徴が見られる。要するにこの報告講演会には、田中総長と強い関係を持ち、学徒錬成部、科外講演部という時局に即応した教育体制の推進を担った大学幹部たちが集まっていたのである。では、彼らは太平洋戦争下、どのようなメッセージを学生たちに送っていたのだろうか。その手がかりとして、まず「学生道」という言葉に着目したい。

そもそも、新学生道樹立運動の「新学生道」という言葉はどのような意味合いなのだろうか。「学生道」という言葉がいつ頃から使われ始めたのかは定かではないが、すでに明治後期には「武士道」に由来する言葉として、学生を取り巻く環境に対する「道徳的基調」の意味合いで用いられていることを確認できる。<sup>(50)</sup> 「学生道」を定義した文献としては、一九一六年に中央大学学長の奥田義人が出版した『学生論』が挙げられる。奥田は「学生の守る可き本分」としての「学生道」を三つの綱領、すなわち「強壯なる身体」、「質実剛健の精神」、「寛容愛他の精神」から構成し、<sup>(51)</sup> 学生のための修養論として提示している。

だが太平洋戦争下、新学生道樹立運動が目指していた「新学生道」はこれら自己修養論の類とは明らかに意味が異なる。前述のように、それは「赤誠報国の信念」に立ち、学生自身が主体的に「国家目的」に貢献することであり、その意味で新たな「学生道」の樹立を目指す運動であった。このような「学生道」が太平洋戦争開戦後、一般的にどれほどの広がりを見せていたのかはわからないが、早大に関しては開戦直後の工藤直太郎第一高等学院教授の『早大新聞』の論説にその言葉を見ることができ、工藤は英語や語学特修を担当し、先にも触れたように早稲田大学新聞社の代表であり、早稲田大学新聞研究会長でもあった。太平洋戦争開戦直後の『早大新聞』一九四二年四月一五日号の論説「学生道の再建」で、工藤は次のように論じている。

「大体日本ほど学校教育を重んずる国家はない。国家興亡の大戦争を敢行しつゝ、ある際に於ても尚ほ国家は学生に対して兵役義務の猶予の特典を与へ、其他学生に対して特殊の待遇保護を加へつゝあることは、日本の学生は深く感銘すべき事柄である（略）国家が今日の学徒に俟つ所以のものは決して職業の道具を作るのではなく、他日国家が本当に必要とすべき知徳一体の人格を錬成することである。今日学徒に取りて最も肝要なる生活態度は、先づ学問の道を探求し、功利教育の結果著しく荒廃した学生道の再建を企図することである」<sup>52</sup>。

工藤の言う「学生道の再建」とは、「国家目的」から逸脱し、「功利」主義に侵された学生を「他日国家が本当に必要とすべき知徳一体の人格」に「錬成」することにある。「功利」からの解放とは、学校教育が卒業後の社会的地位や経済的利益を目的としていたことの反省に立って、教育のすべてが国家の要請に収斂されることを意味する。このように国家と学生とを結びつけ、一切の「功利」を排除するというのが工藤のイメージする「学生道」であるが、こうした考えは工藤のみならず、大学の幹部たちが一様に共有していたものであった。

太平洋戦争開戦から二日後に発行された『早稲田大学新聞』一九四一年二月一〇日号には、早くも川原篤が論説「世界大戦と大学の使命」を寄せ、「知性の要求せられる現代戦に於て、学徒は戦力構成要員として重要な役割を果すべきである。国軍幹部要員とし「て欠」、産業前線の戦士として、その学的素養と軍事能力と徳性と体力とが準備せらるべきであり、大学は、実に、戦争遂行に緊要なる高度人的要素の源泉であり、源泉たるべき自覚に燃え立つのである」と、戦争遂行と大学の「使命」を明確にし、学徒を「戦力構成要員」<sup>(53)</sup>と位置づけた。

さらに田中穂積総長は一九四二年四月入学の新入生に向け、「新入学生に与ふ輝ける使命に生きよ」と題する論稿を『早大新聞』に寄せ、太平洋戦争下の学生の「使命」をより明確に語った。田中の言う学生の「使命」とは何か。田中は「大東亜戦争は（略）道義に基く聖戦」と定義し、「諸君は此聖戦の成果を挙ぐることによつて、世界歴史に新たな時代を作るべき、重大なる使命を荷ふて起つ」と、早稲田大学校歌のフレーズを用いながら、学生の「使命」と「国家目的」とを結合させる。そして「此の如き国家の非常時局に直面しては、何時召集の赤紙が来るやも知れぬ。若し君国が諸君を要求する場合には、欣然としてペンを捨て、銃を執るは勿論のことである」<sup>(54)</sup>と、学生を「聖戦」遂行のための人的予備軍と意義づけたのである。

このように太平洋戦争開戦直後から、学生の「使命」と「学生道」の再建とを結合させたメッセージを大学の幹部たちは発していたのだが、新学生道樹立運動のもつ意味を明確にしたのは今田竹千代である。今田は『早大新聞』一九四三年三月三日号に「壮拳に徹す!!」と題する文章を寄せ、新学生道樹立運動は「早稲田の壮拳に留まらず、「実に全日本、いな全世界に向つて、日本学生の決戦下における逞しい意図と烈々たる気魄を表明せる快拳」であり、「太平洋、印度洋を隔て、遠く敵米英の学生群に対して敢然挑戦せるもの」と、絶大な賛辞を送る。今田がこれほどまでの評価するのは、新学生道樹立運動が「何等一点の利己的精神なく、全く純真に凡てを国家に献け」ているからで

あり、それが「今なほ甘美なる自由主義的享楽主義的な夢を見つ、ある一部の学生層、国民層に対する峻厳なる戒告ともなり、批判ともなる」からである。今田は今もなお残存する一部の「自由主義的」な思潮に対し、「凡てを国家に献け」る「精神」を対置させているのだが、その意味するところは、次の文章に凝縮されているといつてよい。

「惟ふに早稲田建学の精神は何等の位階勲等を求めず、たゞひたすらに国家のために国民の指導者として挺身することであつた。権利や特権を一切奉還して、先づ国家、民族に対する崇高なる義務を履行することが、限公の学園創設の精神ではなかつたか。私権、私利、私産は固より生命をも国家に奉還することなくしては、この未曾有の大決戦に生き残ることは出来ない」<sup>(55)</sup>。

今田によつて、新学生道樹立運動は「早稲田建学の精神」と結びつけられ、そこから導き出された「精神」はあらゆる「私」、その究極の生命をも犠牲にして、国家に奉公することと意味づけられたのである。そして勤労学徒報国隊の活動後には、川原篤が『早大新聞』四月一四日号に論説「決戦態勢と学徒」を発表し、戦局が深刻化するなかで「学徒の負ふ使命」は「戦力構成要員」としての役割にあると改めて明言した。そして学内にあつては要地防空防衛の任務を負い、校門を出れば「皇軍第一線幹部として兵力の根幹」となり、事態が急迫となれば「ペンを棄て剣を執りて直ちに野戦に馳参するの準備」をなすことにあると、学生の「使命」を具体化して見せた。川原は「知性」の重要性も説くが、それも「高度の学的素養は軍事能力の發揮に緊要」<sup>(56)</sup>と、すべてを戦争への貢献に収斂させたのである。

## 二 戦局の悪化と学生

### 1 戦争と学生意識

学生道樹立運動に参加する学生がいる一方で、一般学生の意識はどのようなものだったのだろうか。そもそも学生道樹立運動は全早大生の集結を標榜しつつも、前述のように、現実には募集人員の五〇〇人程度の学生しか参加しなかった。一九四三年度の早大の全学生・生徒数が二三五〇七人<sup>57</sup>であることからすると、四七人に一人しか集まらなかった割合になる。つまり実態は、木戸六郎が記すような「全学的に火が上がった」運動とは到底言えないものであった。木戸の眼には、新学生道樹立運動が「一大運動」と映じたのであろうが、早大生の大多数には、決して共感を呼ぶ運動ではなかったのである。

太平洋戦争下の早大生については、一九四二年に第二高等学院に入学した、いわゆる学徒出陣組の戸井昌造が三つのタイプに分類している。第一のタイプは、何が何でも国のために戦うという「ゴリゴリの愛国主義者」、二つ目のタイプは、せいぜい本を読んで勉強しておこうという「一見まじめ派」、三つ目は、マージャンやナンパに熱中している「デカダン連中」で、戸井の回想によれば、「ゴリゴリの愛国主義者」はごく少数だったという。<sup>58</sup>戸井自身はどのタイプにも属さず、「消極的反戦というか、もしくは積極的厭戦というか」と回想しているが、いずれにしても大多数の学生は戦時下とはいえ、「ゴリゴリの愛国主義」とはかけ離れた学生生活を送っていたのである。

戸井の分類は、当時の早大生の読書傾向からも裏つけることができる。『早大新聞』一九四三年七月七日号および一四日号には、同年五月中の「学生図書閲覧成績」<sup>60</sup>が掲載されている。それは閲覧請求のあった図書のうち、請求回

数が二〇回以上に及んだものの分野ごとのリストだが、際立っているのが河合栄治郎の編著書の多さである。おそろしく、リストに挙げられた五冊以外にも河合の「学生叢書」が広く閲覧されていたことは想像に難くない。河合の他にも、西田幾多郎、阿部次郎、和辻哲郎らの作品が入っているところを見ても、学生のなかに、いわゆる教養主義の影響がまだ根強い<sup>(61)</sup>ことがわかる。歴史関係では六作品が挙げられているが、大森金五郎の『大日本全史』をのぞけば、五冊とも西洋史関係である。伝記の部に『ヒトラー総統伝』が入っているが、これは元第二高等学院教授で、ラグビー部監督でもあった本領信治郎<sup>(62)</sup>の新刊に関心が集まった点を考慮に入れる必要があるだろう。さすがに政治と経済に関しては時局色の濃い作品が目立つとは言え、学術書として注目された研究に関心が集まることがわかる。全体的に見ても、この読書傾向からは「ゴリゴリの愛国主義者」が好むような作品は少ないと言える。

前掲の『早大新聞』一九四三年二月一七日号は新学生道樹立運動を紹介した記事のなかで、「我々はさしづめ近く春の休みを漫然としてぶら／＼過したり、旅行に費したりすることをやめて（略）兎に角生産増強のために猫の手も借りたい方面への勤労鍛錬をやらうではないか<sup>(63)</sup>」と、勤労鍛錬学生隊を主催する学生たちの呼びかけを紹介している。主催者の学生たちからすれば、一九四三年に入っても、まるで戦争とは関係ないかのような日常生活を過ごしている一般学生に対する不満が募っていたことがわかる。個々の学生がそれぞれの思いのままの生活を送ることは、たしかに「同年配の同胞」たちとはかけ離れた日常には違いなかった。

慶應義塾大学教授の小林澄兄も『早大新聞』一九四三年五月五日号に寄稿した「学生論」で、「時間を忘れ切つて無計画的に止め度なく遊び過ぎ<sup>(64)</sup>」傾向を「学生生活の特権でもあるやうに誤解されもし、世間からも大目に見られてゐた」と批判するが、こうした学生意識はまた「戦意」とも無関係ではない。『早大新聞』一九四二年一月二五日号の論説「時局と人心」で中村宗雄専門部法律科長（教授）は、国民のなかに「精神的弛緩」が「や、目に余るも

の<sup>(65)</sup>」として現れつつあることを指摘している。この頃の地方小都市・農山村の青壮年層には、開戦から時間が経過し、高揚していた「戦意」は停滞から弛緩への兆しを見せ始めており、また教員などの有識層のなかには「戦意」の相対的な低<sup>(66)</sup>さが見られていたが、当時の学生の「戦意」も、おそらく同様の傾向にあったものと思われる。

だが一九四三年五月末に入ると、学生を取り巻く環境は二つの面から新たな段階を迎える。まず、五月二日の山本五十六の戦死（四月一八日ソロモン群島上空で戦死。五月二日発表）とアツツ島山崎守備隊二五〇〇人の玉砕（五月二九日玉砕。三〇日発表）が大本営から相次いで発表されたことは、国民のみならず学生たちにも戦局の厳しさを痛感させることになった。早稲田大学では六月五日の山本の国葬の日、戸塚道場に教職員と全学生が集合して遙拜式を挙行し、仇敵の決意を誓った。その式典で田中総長は、「元帥の英霊をなぐさめる途は唯一つ、それこそ米英を徹底的に撃滅するより他はない<sup>(67)</sup>」と、学生たちを奮い立たせた。山本には軍歴のみならず、そのイメージ化された人格が敬愛の対象となっており、その戦死は田中総長が鼓舞するまでもなく、学生たちに大きな衝撃を与えた。長岡中学出身で法学部生の青柳逸雄は中学同窓の山本を「我等の父」と呼び、「父を失った子、何ぞ仇をとらずに居らうぞ、元帥の大精神を己が精神として起つ時は今だ、さあ共に征こう大東亜戦完遂へ」と、『早大新聞』五月二六日号<sup>(68)</sup>の紙上で呼びかけた。

アツツ島に関しては、『早大新聞』六月二日号で「アツツ島の英魂に捧ぐ 学徒我等み後に続き 仇敵米英を断乎撃砕せん」と題する特集を組み、川原教授の「檄」と五学部三年生のコメントを掲載<sup>(69)</sup>している。『早大新聞』は四月発行号から特別の場合を除き、それまでの四頁から二頁構成へと縮小されていたが、それでも紙面の一面大半を割いて、この特集を組んでいる。川原の「檄」は「学徒よ戦場に近づけ」と題するもので、「とかくお互にゆるみ勝ちではあるが（略）学生諸君の気持として大戦争のさ中に徴兵延期の恩典を受けてみて何かちつとしては居られないと

いふ強い気持を皆が持つてゐること、思ふが（略）現在持つその心構へを戦場に近づけること、これが最も肝要だと「思ふ」と書いている。川原は学生と戦場との間に距離があることを認めたくえで、戦局悪化に直面した学生の「心構へ」を説いたのである。

コメントを寄せた五人の学部生のうち、たとえば理工学部三年生の松本誠一が「国内にあると兎角実際から疎く戦の激烈さを痛感することが少いものですが、今度のことは全く戦の如何なるものであるかを切実に感じました」と書いているように、玉砕の衝撃は戦争の現実を実感させるに余りあるものがあつた。『早大新聞』は「われら青年学徒は絶海の孤島に草むした屍を乗り越えて米英撃滅に起たねばならない。享楽、不平、不満、一切を捨て、学徒は起たねばならない」と書いたが、戦局の悪化が具体性を帯びて現れてきたことは、学生をして戦場への距離が一挙に縮まったことを認識させた。

もうひとつの新たな段階とは、海軍予備学生の募集である。五月二九日、海軍当局は予備学生の大量採用を発表したが、この日はまさに山本の戦死とアツツ島玉砕という二つの大本営発表の間に位置する。予備学生の募集は海軍の人的欠乏、なかでも飛行科士官の大幅な不足に伴うもので、飛行科四〇〇〇名、整備科七〇〇名、兵科二〇〇〇名の採用予定が報じられた。出願資格は大学の学部、予科、高等学校高等科、専門学校またはこれと同等以上の学校卒業者で、一〇月一〇日時点で満二八歳未満の者を資格対象者とした。翌三〇日付の新聞には平出英雄海軍報道部長が、「海軍は、大学、高等専門学校出身者、ならびに在学者にたいして、大きな期待をかけている」との談話を発表し、学生たちへの入隊を呼びかけた。すでに四月、海軍では軍医・主計・技術などの各科見習尉官の募集を行つていたが、この予備学生募集が学生たちに与えたインパクトは極めて大きく、入営が確実視されていた学生たちに重要な選択肢を与えるものとなつた。<sup>(73)</sup>『読売新聞』七月二一日付によれば、十七日の応募締め切りを前にした五日現在の志願

者は、総数九六八九名のうち、早大一九九八名、日大一〇九七名、東京帝大四五八名、慶大七三三名、明大八八二名などとなっていた。このうち東大法学部では、海軍主計、法務官、予備学生を一人で二種目を志願する者もおり、三種目の合計応募数は卒業見込者の一二割に達したという。<sup>(74)</sup>

予備学生に大量の応募があった理由として、『第十三期海軍飛行専修予備学生誌』は海軍機での戦闘参加が日本を救うという期待や海軍への憧れなどをその理由に挙げてはいるが、入隊時点ですでに士官並みの待遇を与えられるという有利な条件<sup>(75)</sup>も、学生からの応募を増加させる要因となった。陸軍で一兵卒から入るよりは、海軍で士官並みの待遇で入隊する方が、たとえ航空機の危険性はあったにしても学生たちを魅きつけるに余りあるものがあり、予備学生の応募には軍隊生活を送るうえでこうした打算的な面も少なからずあった。なお航空機操縦者の募集に関しては、陸軍でも特別操縦見習士官の制度が七月五日付の官報で公布された。これは高等専門学校、大学学部在学者および卒業生のなかから航空機操縦の適任者を選抜し、ただちに曹長の地位を与え見習士官に任ずるもので、陸軍士官学校卒業生以外は二等兵からたたき上げるといふ陸軍の伝統を破る異例の措置<sup>(76)</sup>だった。この募集に早大からどれ程の応募があったかは不明だが、海軍の予備学生ほどではないにしても、少なからぬ反響があったものと推測される。<sup>(77)</sup>

このような状況を前に、学生たちのなかでは「何をなすべきか」がひとつの課題となつてあらわれてくる。『早大新聞』六月一六日号は「山本元帥斃れ、アツツ島勇士また玉碎、世界情勢は目まぐるしくも緊迫する。この秋学徒は一体如何にあるべきかとの幾多論争は各学生初め全ての識者間の問題となつて来<sup>(80)</sup>」と報じている。早大内でもこのテーマについて熱心な論争が繰り広げられており、その一例として早大東亜法栄会主催の討論会が紹介されている。六月一日、同会が東大アジア研究会、法政東亜研究会の有志を招き、学生ホールで開催した討論会は「学生及び学生団体何をなすべきか」をテーマとし、二時間三〇分にわたつて議論が繰り広げられた。参加者は早大、東大、

法大の他に、拓殖大学、大東文化学院から三四名の参加があり、「学生と勤勉」、「学生と政治」、「学生と徴兵延期の恩典」などが論議され、「過去学生々活の反省から如何に吾々は今後進んで行くべきか」をめぐって活発な議論が展開された。また六月一二日には、前述の東亜協会が三田にて、慶應義塾大学と「学生々活の反省」についての座談会を開催し、兵役に関する恩典に感謝を捧げるとともに、学生のあり方について討論を繰り広げている<sup>(87)</sup>。このように、戦局の悪化が明らかとなるなか、「学徒は一体如何にあるべきか」が大学を横断して学生たちの関心を高めつつあったのである。

## 2 「決意」と「使命」

戦争と学生という観点から一九四三年を通観した時、六月二五日の「学徒戦時動員体制確立要綱」の閣議決定は大きな意味を持つ。この「要綱」は学校教育を国家の現実に即応させ、「勤労働員を強化して学徒尽忠の至誠を傾け、其の総力を戦力増強に結集<sup>(88)</sup>」させることを方針とするもので、『朝日新聞』は学徒の総力を国家の要請に凝集させるための「教育の全面的機動化」（六月二六日付）と解説した。杉山謙治学徒錬成部副部長（教授）は『早大新聞』八月二五日号に論説「今や蹶起の秋」を寄せ、「大東亜戦争は今正に、完全に、決戦段階に入った。前線といひ、銃後といふも、最早そこには何等の差別がない。校門は當門に通じ、當門は前線に通じてゐる。と同時に、校門は生産面に通じ、生産は又直接戦場に通じてゐるのだ<sup>(89)</sup>」と書いた。これはまさに、「要綱」を杉山の言葉で言い換えたものにならない。

この要綱の発表以降、『早大新聞』には九月の繰り上げ卒業を前に「決意」や「使命」という文字が目立つようになる。特集として「巢立ちに当り 我等の決意」（七月七日号<sup>(84)</sup>）や「巢立つ我等の決意」（七月二四日号<sup>(85)</sup>）が生まれ、海

軍予備学生や陸軍特別操縦見習士官へ志願した学生たちの「志願の決意」(八月二十五日号<sup>(86)</sup>)も掲載された。そしてそこに示された「決意」には、それまでの学生生活の反省が吐露されていた。法学部三年生の上林貞弘は勤労鍛錬学生隊に参加した学生と推測されるが、彼は中学以来「自由主義的學生々活から日本的學生々活への回帰の途を、われわれは身をもつて歩んで来た」とした上で、「われわれは、かつて徒に小さな自己の死の恐怖について苦しんで来た。しかし今や個人の死は問題でなく、苛烈なる現実に、光耀ある民族の生こそ、われわれの最も切実な問題となつた」と書き、これを「自己本来の使命」と位置づけた。「決意」に至るまでの「小さな自己」の死の恐怖<sup>(87)</sup>を克服し、新たな「使命」に邁進しているというのである。

また『早大新聞』九月八日号は、卒業間近の学生による座談会を掲載しているが、ここからも学生の置かれた環境と「決意」が垣間見える。この座談会は『早大新聞』から工藤直太郎代表の他学生二名、学生代表としては各学部から磯部忠男ら五名が参加して行われた。このなかで法学部の市川邦正は、「私達の存在が過渡期にあるため過去の遺物を少からず持つてゐたことは事実です。加ふるに年限短縮、学生冷視など相当痛烈な事態に遭遇したので、決心する迄は実に迷つた。がこの頃は反つてよくなつた。段々焦々してゐた気持も納まり、眼前に控へた米英との決闘をチツと凝視するのみです。劍を持つ一刻が迫つたのだと思ふと嬉しくてたまらぬ<sup>(88)</sup>」と述べている。「決心」するまでには「焦々してゐた気持」との葛藤があつたことを、市川は率直に認めている。

一九四三年を通じて戦局悪化が著しくなるなかで、これまで見てきたように学生の間ではさまざまなレベルで煩悶や葛藤が見られたが、一〇月二日の在学徴集延期臨時特例公布<sup>(89)</sup>、いわゆる学徒出陣は、そうしたものをすべてを強制的に断ち切る役割を果たした。『早大新聞』には、これまで登場した大学幹部たちが一斉に学生たちに「餞」の言葉を送った。見出しのみ掲げれば、杉山謙治「今ぞ民族使命達成の秋」<sup>(90)</sup>、工藤直太郎「待てる日は来れり―出陣の学徒に

「餞けすー」、川原篤「学徒出陣の秋来る」、今田竹千代「餞けの詞」、そして田中穂積「尽忠報国の念願もて 早稲田健児の面目を發揮せよ 征け!! 学徒諸君」(以上『早大新聞』一〇月一三日号)。

このうち田中総長のメッセージは、一〇月一五日の出陣学徒壮行会で学生たちに直接発せられた。そのなかで田中が、「征け諸君! (略) 大君の御楯となつて興亜の大業に参加し、その礎石となると云ふことは誠に価値高く意義深き事柄であつて、私は諸君の勇戦奮闘、武運の長久を心から念願し、他日諸君が勝利の栄冠を戴いて再び学園に還る日を鶴首して待つものであるが、然し乍ら、勇士は出陣に當つて固より生還は期すべきでない。即ち身命を捧げて護国の神と為る、又男子の本懐たるを失はない」と、出陣していく学徒たちに餞の言葉を送つたことも、これまでの経緯を見れば決して不思議ではない。

### おわりに

一九九三年二月一日、私立大学総長・学長二七二名による声明「学徒出陣五〇年にあつて」<sup>(95)</sup>が発表された。第一回の学徒兵入隊から五〇年の日に発表されたこの声明は、賛同した総長・学長の多さも相まって社会の注目を集めた。大学が戦争の時代について言及した、これほど大規模な声明は類がない。声明では「今日の大学の前身をなす諸学校が、学業を志した有為の若人たちを過酷な運命に委ねるほかなかったことに、深い胸の痛みを覚えるのである」と痛切な悔恨が表明されている。この声明には、全国の私大の七割におよぶ総長・学長が賛同しているが、早稲田大学や慶應義塾大学、同志社大学のトップの名前はその中にはない。それらの大学がどのような判断で声明に加わらなかったのか、その理由はわからない。

二〇一五年八月、右の声明にも参加した中央大学は酒井正三郎総長・学長名で「創立一三〇周年 そして戦後七〇年―あらためて戦争と中央大学を考える―」<sup>(96)</sup>を發表した。そのなかの一節に、次のようにある。

「本年はアジア太平洋戦争終結から七〇年の節目にあたります。中央大学はこの戦争によつて多大な影響を受けたと同時に、戦争の遂行のために学生を戦地に送ることを認め、巻き込んでいった責任があります」。

中央大学はアジア太平洋戦争期の大学の責任をこのように明確に認めたのだが、総合大学においてここまで戦争責任について踏み込んで言及したケースは稀である。戦後七〇年が経過し、ついに大学も戦争責任について語りはじめたのかという驚きと感慨を持つ。しかしながら同時に疑問を感じざるを得ないのは、では中央大学は戦争中のどのようなできごとを指して戦争責任を認めたのかという点である。「戦争の遂行のために学生を戦地に送ることを認め、巻き込んでいった責任」というが、それは中央大学が戦争中に、どのような行為をしたことが念頭に置かれているのだろうか。『中央大学百年史』のどの部分が、その行為に相当するのだろうか。この点が必ずしも明確ではないために、この声明の持つ重要性が大学における戦争責任という一般論に解消されかねない危惧を感じる。

翻って、本稿で対象とした早稲田大学の場合はどうだろうか。早稲田大学において戦争の時代に対するメッセージは、一九九〇年の創立記念日に建立された「平和祈念碑」が相当する。その碑文には、西原春夫総長名で次のようにある。

「征く人のゆき果てし校庭に音絶えて 木の葉舞うなり黄にかがやきて

この歌は、太平洋戦争当時の一女学生が詠んだものである。

学生のないところに教育は成り立たない。平和こそ教育の原点であることを、この歌は痛いほど明確に教えてくれている。戦争のため志半ばにしてたおれた早稲田大学関係者への鎮魂の思いをもこめて、今ここにこの碑を建てる。<sup>(97)</sup>

この碑文は「平和こそ教育の原点」と位置づけ、鎮魂の思いを込めたものとなっているが、「学徒出陣五〇年にあたって」に見られる、大学が学生たちを戦場へ送り出さねばならなかった、その主体としての苦悩や悔恨はあまり感じられない。戦後七〇年が経ち、今、早稲田大学に求められているものは、中央大学が発した「戦争の遂行のために学生を戦地に送ることを認め、巻き込んでいった責任があります」というメッセージではないだろうか。

※ 本稿は、二〇一五年一〇月二四日に早稲田大学教員組合・早稲田大学職員組合主催により、同大学戸山キャンパスで開催された公開学習会「アジア太平洋戦争と早稲田大学」での報告をもとにしたものです。

## 註

- (1) 森岡清美『若き特攻隊員と太平洋戦争』吉川弘文館、一九九五年、三頁。なお同書は二〇一一年に、同社の歴史文化セレクションの一冊として復刊された。
- (2) 森岡氏は最も戦死者の多かった一九二〇年から二三年生まれを「死のコンボイ」世代と名付けたことでも知られる。「死のコンボイ経験世代の戦後」『社会学評論』四一一、一九九〇年。
- (3) 前掲『若き特攻隊員と太平洋戦争』六八〜九頁。
- (4) 日本戦没学生記念会編『新版第二集 きけ わだつみのこえ』岩波文庫、二〇〇三年、二八五〜六頁。
- (5) 同右、二八六頁。
- (6) 同右、二八六頁。
- (7) 早稲田大学編『早稲田大学百年史』第三卷、一九八七年、一〇五三頁。
- (8) 早稲田大学編『早稲田大学百年史 総索引年表』一九九七年。
- (9) 『縮刷版 早稲田大学新聞』第七卷、龍溪書舎、一九八〇年。
- (10) 編輯員は卒業後、新聞社など報道機関に就職するケース

が多かったようである。一九四一年二月卒業生を例に取れば、編輯員のうち三人が読売新聞社、同盟通信社、朝日新聞社に入社している。前掲『早大新聞』一九四一年二月十七日号、一三八頁。

- (11) 同右、一九四三年二月一七日号、三三三頁。  
 (12) 『読売新聞』一九四三年二月二七日付夕刊。  
 (13) 同右、一九四三年二月二八日付夕刊。  
 (14) 『毎日新聞』一九四三年三月六日付夕刊。  
 (15) 前掲『早大新聞』一九四三年三月三日付。  
 (16) 『読売新聞』一九四三年三月六日付夕刊。  
 (17) 前掲『早大新聞』一九四三年四月二二日付、三三五頁。  
 (18) 前掲『早稲田大学百年史』第三卷、七七〇頁。  
 (19) このうち閩南会は五月一日、大隈講堂で石原広一郎を招き、「最近の南方建設事況」と題する講演会を行うとの記事が『早大新聞』四月二八日号(三三七頁)に載っている。また『早大新聞』三月三日号(三二九頁)によれば、南洋研究会は今後、インド・ビルマ班、泰国・仏印・マライ班、東印度諸島班、フィリピン及カロリン諸島班、ニューギニア・濠州及ニュージールランド班の五班に分かれて研究を行うことになったとある。
- (20) 前掲『早大新聞』三月三日号、三二九頁。  
 (21) 同右、一九四三年四月二一日号、三三五頁。  
 (22) 同右、一九四三年四月七日号、三三三頁。なお後藤力は一九四三年九月に文学部社会学科を卒業し、岩手日報に入

社した。同右、一九四三年八月二五日号、三六一頁。

- (23) 前掲『早稲田大学百年史』第二卷、一〇五三頁。  
 (24) 『読売新聞』一九四三年三月六日付。  
 (25) 同右、一九四三年四月七日号、三三三頁。  
 (26) 同右、一九四三年四月一四日号、三三三頁。  
 (27) 日中戦争勃発後、国民精神総動員の実践として勤労奉仕が位置づけられ、大学においてはその具体的な奉仕活動が年を追うごとに強化されていった。一九四一年八月八日、文部省は各学校に全校組織の学校報国団の編成を訓令、これにより各学校に「学徒の修練」、「集団勤労の訓練」、「国家奉仕の労務」を目的とする報国隊の結成が義務づけられた(前掲『早稲田大学百年史』第三卷、一〇四七頁)。早稲田大学ではこれに先立つ八月一日早稲田大学報国隊を結成、八月三日からは第二高等学院生三〇〇人を東京兵器補給廠に派遣し、報国隊としての活動を開始した(同右、一〇五〇頁)。さらに同年一月二一日には、一般国民を対象とした国民勤労報国協力令が制定され、厚生大臣または地方長官から学校長に対し、協力について必要な措置を命ずることができるようになった(福間敏矩『学徒動員・学徒出陣』第一法規、一九八〇年、一四頁)。太平洋戦争開戦後の翌四二年一月には、理工学部報国隊に出動が発令され、学部報国隊最初の発動となった(前掲『早大新聞』一九四二年一月二八日号、一五〇頁)。以後、休暇中のみならず、授業期間中においても報国隊に動員令が下り、奉仕

活動が強化されていった。

(28) 前掲『早大新聞』一九四三年二月一七日号、三三三頁。

(29) 一例を挙げれば、杉山謙治調査課長が野々村戒第三一学院長に宛てた、一九四〇年六月四日付「早慶野球戦後に於ける学生の行動報告」(「第一高等学院資料」一〇二、早稲田大学大学史資料センター所蔵)には、「早慶野球戦後、学生は新宿、銀座等の盛場に流れ出で、飲酒高吟し、球場に於ける興奮を更に街頭にて爆発せしむること毎年の例となり、尚其の跡を絶つに至らず。時局下、最高学府学生の態度として寔に遺憾至極のもの有之、之を目撃する今次事変に於て同一年輩の子弟が護国の英霊となり、或は現に戦場にある父兄の心衷はもとより、世人の反感實に甚だしきもの有之候。今にして根本的対策を講ずるに非ざれば、由々しき教育上の問題として、今後も尚統出するものと考察せられ(略)」とある。

(30) 後に学徒出陣で海軍に入隊し、特攻で戦死した早大生市島保男の手記からも、そうした煩悶が聞こえる。学徒出陣決定直後、神宮外苑競技場で開催された文部省主催の出陣学徒壮行会に市島は参加しなかったのだが、その理由を友人の市瀬宗夫に宛てた手紙で、「僕は文部省の大壮行会に実のところ行きたい気持ちだった。(略)然し僕は行けなかった。何故学生のみがかくまで騒がれるのだ。同年輩の者は既に征き、妻子ある者も統々征っている。我々が今征くのは当然だ。悲壮だと言うのか、では妻子ある者は尚更

だ。学生に期待する故と言うのか、では今まで不当な圧迫を加え、冷視し、今に至りて一変するとは」(日本戦没学生記念会編『新版きけ わだつみのこえ』岩波文庫、一九五五年、三五五頁)と書き記している。

(31) 前掲『早大新聞』一九四三年四月二日号、三三五頁。

(32) 前掲『新版第二集』きけ わだつみのこえ』二八九頁。

(33) 『毎日新聞』一九四三年三月二日付。

(34) 同右、一九四三年三月六日付夕刊。

(35) 前掲『早大新聞』一九四三年九月八日号、三六五頁。

(36) 同右。

(37) 同右、一九四三年四月一日号、三三三頁。

(38) 前掲『早稲田大学百年史』第三卷、九四八頁。

(39) 同右、一〇六七〜八頁。

(40) 同右、九五三頁。

(41) 同右、八三三頁。

(42) 早稲田大学編『早稲田学園』一九四三年版、五五頁。

(43) 前掲『早稲田大学百年史』第四卷、一五七頁。

(44) 前掲『早稲田大学百年史』第三卷、八六二頁。

(45) 同右、九五〇頁。

(46) 『早稲田学報』一九四一年一月号、五頁。学徒錬成部は、一九四二年一月二四日文部省に設立された「国民錬成所」の魁」(前掲『早稲田大学百年史』第三卷、九四六頁)とされる。なお、「錬成」が戦時下にもつた意味については、寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』

- (東京大学出版会、一九八七年)が詳しい。
- (47) 同右、一一〇五頁。
- (48) 前掲『早稲田大学百年史 総索引年表』二八〇頁。
- (49) 前掲『早稲田大学百年史』第三卷、一一〇五頁。
- (50) 山本珠美「戦前日本の高等教育における『市民的責任感』加野芳正・葛城浩一編『高等教育における市民的責任感の育成』広島大学高等教育研究開発センター、二〇〇四年、三三三頁。
- (51) 奥田義人『学生論』実業之日本社、一九一六年、二四五～五六頁。
- (52) 前掲『早大新聞』一九四二年四月一五日号、一七五頁。
- (53) 同右、一九四一年二月一〇日号、一三三頁。
- (54) 同右、一九四二年四月八日号、一七一頁。
- (55) 同右、一九四三年三月三日号、三三〇頁。
- (56) 同右、一九四三年四月一四日号、三三三頁。
- (57) 前掲『早稲田大学百年史』第四卷、七九六～七頁。
- (58) 戸井昌造『戦争案内』平凡社、一九九九年、三二頁。
- (59) 同右、三三頁。
- (60) 前掲『早大新聞』一九四三年七月七日号および一四日号、三五七、三六〇頁。入館者総数四五〇四七人中、閲覧者総数(新聞閲覧者を除く)は一六五〇九人で、閲覧図書総冊数は三〇四〇一冊、一日一人平均閲覧図書冊数は一・八冊となっている。このうち学生が閲覧を請求した図書のみで請求回数が二〇回以上に及んだもののうち、理工系と芸

術系の書物を除くと以下の通りとなる。なお、誤植が散見されるため、判明する範囲で修正した。

- 哲学の部：桑木巖翼『哲学概論』、出隆『哲学以前』、出隆『ギリシャの哲学と政治』、河合栄治郎編『学生と哲学』、小沢恒一『青年と教養』、西田幾多郎『善の研究』
- 文学の部：阿部次郎『三太郎の日記』、岸田国士『泉』、獅子文六『南の風』、林芙美子『放浪記』、島木健作『運命の人』、岩田豊雄『海軍』、阿部知二『幸福』
- 教育の部：河合栄治郎編『学生に与ふ』、河合栄治郎編『学生と生活』、安倍能成『青年と教養』、河合栄治郎編『学生と学園』、加田哲二『如何にして学ぶべきか』、富野敬邦『国家と大学』
- 歴史の部：煙山専太郎『西洋最近世史』、大類伸『西洋史新講』、坂口昂『概観世界史潮』、瀬川秀雄『西洋全史』、恒松安夫『近代西洋史』、大森金五郎編『大日本全史』
- 伝記の部：五来欣造『人間大隈重信』、鍋山実『印度の巨象 ガンダーとネール』、エーヴ・キュリー『クレオパトラ』(川口篤他訳)、本領信治郎『ヒトラー総統伝』
- 地理の部：和辻哲郎『風土』、吉川英治『南方紀行』、佐藤弘『南方共栄圏の全貌』、畠中敏郎『仏印風物誌』、南洋協会編『南洋案内』
- 社会の部：横山健堂『日本相撲史』、田部重治・熊沢復六共編『北アルプス』、川崎隆章編『尾瀬と檜枝岐』、河合栄治郎『社会思想史研究』

- 法律の部：草野豹一郎『刑事判例研究』、我妻栄『民法講義』、英語研究会翻訳部訳『ゲルグート英法原理』、ヴィノグラドフ『英法概論』（山名寿三訳）、黒田覚『改訂日本憲法論』、我妻・中川『民法』（東京堂）中野重雄現代民法の基礎理論
- 政治の部：花見達二『日本政治』、長谷川了『日米開戦の真相』、大熊信行『国家科学への道』、吉富重夫『国防国家体制論』、今中次磨『政治統制論』
- 経済の部：舞出長五郎『理論経済学概要』、北沢新次郎『経済学原理』、武村忠雄『戦争経済学入門』、谷口吉彦『大東亜経済の理論』、波多野鼎『経済講話』
- (61) 教養主義については、筒井清忠「学歴エリート文化としての教養主義の展開」（『日本型「教養」の運命』岩波現代文庫、二〇〇九年所収）を参照。
- (62) 本領信治郎は一九四二年の翼賛選挙で当選し、この時は衆議院議員だった。
- (63) 前掲『早大新聞』一九四三年二月一七日号、三三三頁。
- (64) 同右、一九四三年五月五日号、三四〇頁。
- (65) 同右、一九四二年一月二五日号、二八四頁。
- (66) 荻野富士夫『戦意』校倉書房、二〇一四年、六〇～六頁。
- (67) 前掲『早大新聞』一九四三年六月九日号、三四九頁。
- (68) 同右、一九四三年五月二六日号、三四五頁。社会学者として著名な中野卓は、当時、東京帝国大学文学部の社会学科二年生だったが、山本五十六には「人間として他の高官の軍人には抱いたことのない特別の感じを持つており」、国葬の日には「海軍水交社が一般市民に公開されて参詣の許される時間には、長蛇の列をなしていた市民の一人としてその列に加わつた」という。中野は「そのとき私は、日本が日一日敗戦へと近づいて行く、その一つの節目に立会うという思いでした」と回想している。中野卓『学徒出陣』前後、新曜社、一九九二年、八九頁。
- (69) 同右、一九四三年六月二日号、三四七頁。
- (70) 第十三期誌編集委員会編『第十三期海軍飛行専修予備学生誌』一九九三年、三一～二頁。
- (71) 同右、三一頁。
- (72) 蜷川壽恵『学徒出陣』吉川弘文館、一九九八年、五六頁。
- (73) 前掲『第十三期海軍飛行専修予備学生誌』三一頁。
- (74) 同右、三二頁。
- (75) 同右、三一頁。
- (76) 当時、東京第三師範学校の研究科に在学していた土方敏夫は友人から予備学生の応募を誘われるが、その友人は「海軍十三期飛行予備学生というのは、入隊時から士官並みの待遇で、飛行機の操縦者として、全国の大学・高等専門学校の卒業生を対象に募集している（略）徴兵で行けば、一兵卒からやらねばならないから、こんな良い機会はまたとないと思う」と言ったという（土方敏夫『海軍予備学生零戦空戦記』光人社NF文庫、二〇一二年、一五～六頁）。
- (77) 『朝日新聞』一九四三年七月五日付。

- (78) 前掲『学徒出陣』四六～七頁。
- (79) 日本大学百年史編纂委員会編『日本大学百年史』第二巻、二〇〇〇年、八六二頁。
- (80) 前掲『早大新聞』一九四三年六月一六日号、三五二頁。
- (81) 同右、一九四三年六月九日号、三四九頁、および六月一六日号、三五二頁。
- (82) 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第七巻、大日本雄弁会講談社、一九六四年、二六〇～二六二頁。
- (83) 前掲『早大新聞』一九四三年八月二五日号、三六二頁。
- (84) 同右、一九四三年七月七日号、三五七頁。
- (85) 同右、一九四三年七月一日号、三五九頁。
- (86) 同右、一九四三年八月二五日号、三六二頁。
- (87) 同右、一九四三年七月七日号、三五七頁。
- (88) 同右、一九四三年九月八日号、三六五頁。
- (89) 九月二二日の文部当局談として徴兵猶予の停止が発表され、多くの学生たちはこれを新聞やラジオを通して知ることになった。
- (90) 前掲『早大新聞』一九四三年一〇月一三日号、三七二頁。
- (91) 同右、三七二頁。
- (92) 同右、三七四頁。
- (93) 同右、三七四頁。
- (94) 同右、三七二頁。
- (95) 『世界』一九九四年一月号、二九四～六頁。
- (96) 中央大学ホームページ「新着ニュース」二〇一五年八月六日。
- (97) 『早稲田学報』一九九〇年一二月号、一三～四頁。なお、「平和祈念碑」の建立については、西原春夫「教育の原点」『早稲田学報』一九九〇年一月号、二～三頁を参照。